

夜光杯

山田
弘子

愛蔵文庫判
自解句集

13

波音を聞きに来てゐる卒業子

(昭和四十九年三月)

阪急探勝会での作。須磨駅を降りると南側はすぐ海辺で、陽春の日差しを敷きつめた海が眩しく広がっていた。卒業式を終えたばかりの高校生が証書の筒を手に、浜辺に腰を下ろして解放感を味わっている風であった。須磨寺へと歩をとる。ここは源平一谷の合戦のゆかりの寺として知られ、熊谷直実に撃たれた平敦盛の青葉の笛が寺宝として祀られ、敦盛首洗池などがある。また須磨は明治二十八年、正岡子規が従軍記者として中国に渡る途中に咯血し、急遽帰還し病を養った地で、須磨寺の境内には句碑がある。

魂送りして来し母の足濡れて

(昭和四十九年八月)

盆の間家族と過ごした先祖の霊。十六日の早朝、円山川のほとりへ行って魂送りをするのは母の役目であつた。さんだわらの上子供物をのせ、花と線香を携えて約一キロ離れた川辺まで行き、母は彼岸へ懇ろに仏を送つた。朝私が目覚めた頃にはもう家の中に母の姿はなかつた。仏送りを済ませ帰ってくる母のか細い脚が朝露まみれに濡れていたのを思い出す。田舎の長男の嫁として、厳しい舅に仕えた病弱な母の生涯は決して幸せとは言えなかつたが、母の毅然とした生き方から、私は多くのものを学んできた。

雛の間の賑はひに猫右往左往

(昭和五十二年二月)

大橋宵火さんのお孫さん円ちゃんのお雛に招かれた。この時どんな顔ぶれであつたかはさだかでないが、当時「渋柿句会」という数人の仲間がいつも箕面の宵火さんのお宅に伺つて句会をしていた。

猫の好きなども江夫人は時々三味線を弾いて小唄などをうたつて下さつたものだ。昨年(平成十三年)そのとも江夫人も亡くなつた。宵火さんは大橋桜坡子さんの甥ごさん。現在の関西俳壇では最も古い俳人で、一日でも長生きをして頂きたいと願っている。(この稿を書き上げたあと、九月二十五日、宵火さんの訃報が届いた)

心先に着いてゐし地よりリラの香よ

(昭和五十六年六月)

北海道の六月は本州のように鬱陶しい梅雨がないので、毎年この季節にホトトギス北海道大会が開催された。この年の開催地は札幌。着いてすぐに句会場へ。初めての北海道の旅の昂りが上句の字余りにも伝わってくる。からりと晴れ渡った北の大地はライラック、はまなす、マーガレットなどの花が一気に咲き溢れ、旅人を歓迎してくれた。現地の依田明倫さんの用意して下さったとれたてのアスパラガスの美味しかったこと。「再会のすでに日焼の腕なる」「太陽に歓迎されしサングラス」「白靴をあくまで白く北国へ」

夜光杯磨く秋日の窓あかり

(昭和五十九年九月)

八月二十六日から九月五日まで十一日間のシルクロードの旅へ。

広大な大地と三千年の歴史を肌で実感した。西安、蘭州、敦煌、酒泉、北京と巡る。急ピッチで近代化への足音が聞こえる町々であった。一九七五年に発見された、始皇帝の死後も侍り続ける兵馬俑の群、駱駝の背に揺られて行ったゴビ灘、三千年涸れたことのない月牙泉、祁連山脈を染める夕日、祁連山脈から出る玉を磨き、「夜光杯」を作る職人たち。王翰の詩「葡萄の美酒 夜光の杯」で知られる夜光杯を旅土産に求めた「ろば連れて砂漠の町の夜長人」

夕月をのせて薄氷やや動く

(昭和六十二年二月)

二月五日東京偶会(保佳、和子、美奇、基子、貞子、鈴子、弘子)。

自由が丘での手描染色教室の仕事で上京した私を、昔の句会仲間が迎えて下さり、湯島天神を吟行した。昭和五十四年に東京暮らしを始めて間もなく、谷口和子さんたちと作った句会「七人会」のメンバーに保佳さんが加わり、ひさびさの懐かしい句会の時間を持った。前日に積もった雪が境内の隅にまだ消えずに残っていたが、寒明けの日差しは明るく、湯島の梅が丁度見頃であった。「旅にして天神さまに厄落し」「日脚伸びをりし鏡花の筆塚に」

もてなしの茸山までひと走り

(平成元年十月)

白鳥の渡って来る兵庫県の東条湖に近い秋津窯を訪ねた。若い陶芸作家藤村時雄さんの窯である。藤川遊子さん、宇多喜代子さん、田畑美穂女さん、そして私の四人の小さな旅。芒や桜を燃やした釉灰を使う独特の味わいの時雄さんの作品には多くのファンがあり、私もその一人であった。宇多さんもまだまだこんな時間が持てた頃である。待ち受けていた時雄さんは「ちよつと裏山へ」と走ると、籠にはしめじや網茸などが入っていて、すぐにお昼に奥様の手料理の御馳走が並んだ。時雄さんの若すぎる死が惜しまれてならない。

騎手の息馬の息過ぐ冬木かな

(平成二年一月)

わが家と谿を一つ隔て神戸大学のキャンパスがある。正月二日、馬術部の騎馬初めがあるというので出掛けた。六甲嵐の寒風がしんと凍みた。騎手も馬も白い息を吐きながら新年の淑気のただよふ馬場を軽く駆けてゆく。女子学生の装う乗馬服が凜々しかった。眼下にはちぬの海が一望され、正月の穏やかな光を返していた。何とも贅沢な馬場である。空に枝を広げたキャンパスの冬木の静と、騎馬の動を交錯させた一句。「たてがみに六甲嵐騎馬始」「初茜馬上の少女荘厳す」「馬術部の二日の仕事寝藁干す」

午後三時酔芙蓉なほゑひもせずん

(平成二年十月)

自分の句の殻を破った一句として忘れられない句。朝純白に開き、次第に酒に酔ったようにピンク色に染まり、夕方には赤を深めて散る酔芙蓉である。句会を前に汀子邸の庭に出ると、午後三時だといふのにピンクに染まらず白いままの酔芙蓉に私は何か憐れを覚えた。秋も深まると太陽光線も弱くなって十分に染まらないのだなと思った。いろは歌の「ゑひもせず」が浮かんだ。ただ「ん」を付けるかどうかはずっと躊躇していた。投句間際に「どうだ」という思いで「ん」をつけて投じた。今更ながら選者の勇氣に脱帽した私である。

円虹をもて六甲の春意とす

(平成六年三月)

朝日カルチャー芦屋教室を受け持つようになって間もなく、みなで吟行会を試み、浅春の芦屋奥池へ出掛けた。薄雲に覆われた空にはおぼろげながら日輪が浮かんでいた。「あれ、円い虹が！」と誰かが叫んだ。確かに日輪を中心に大きな虹の輪を仰ぐことが出来た。この時点で私はまだ俳誌創刊のことは考えもしていなかった。創刊を決意したのはそれから二カ月も後である。あれこれ俳誌の名前を考えたが、どうも納得出来ずにいたある夜中、ぱっと目が覚め、「円虹」という名が浮んだ。「これだ！」と即決した。

花茶屋の床のどこかが斜めなる

(平成六年四月)

はるばるとミュンヘンから吉野山の桜の旅に参加されたギユンタ・クリンゲ氏と通訳のランベルト・順子さん。クリンゲ氏は製薬会社の会長を勤める傍ら、毎日欠かさず三句を作る俳人である。温泉旅館の畳の間でござる寝の泊まりは大丈夫だろうか、とみな心配したが杞憂に過ぎず、大変な感激ぶりであったのも懐かしい思い出。

宿から如意輪寺へと続く道すがら、谿に迫り出して組まれた茶店で一服するのがならい。板の上に蓆を敷いただけの床は甚だ心もとない。足裏の感覚がしかと捉えた不安定さが生んだ一句である。

侍るごと侍らるるごと芒と居

(平成六年十一月)

芒の君と呼ばれる長山あやさん。芦屋の家の庭にまるで分身のように芒を大切に育てていた。芒の句が詠みたくて俳句を始めたという人である。春夏秋冬芒と向き合いながら暮らしていたが、ある事情から家を手離すことが決まり、庭一杯に育った芒と別れることになった。天井まで届きそうな芒を刈り取り、新しいマンションに運びこみ、やっぱり芒と向き合って暮らしているあやさん。「あのままあの家にいたら、きっと震災で梁か書物の下敷きになっていたでしょうね」という。昨年(平成十三年)句集『芒とや』を出版した。

遠ざかるごとく近づくとく春の山

(平成八年三月)

奈良三輪神社で日本伝統俳句協会関西支部大会が開催され、会場まで汀子先生の車に便乗させて頂いた。奈良盆地はすっぱり春霞に包まれ、とりわけ大和三山は神代を彷彿とさせる表情をしていた。

この句は、近づいては遠ざかる道中の山々の様子を、「ごとく」の直喩を用いて表現した。しかも物理的には不合理な「遠ざかるごとく近づくと」と逆説的に比喩を用いたのである。霞がかつた春の山なればこそ生きた比喩といえるかもしれない。俳句表現上、直喩をいかに扱うかは一つの大きなポイントと言える。

三角の一角が口いぼむしり

(平成八年十月)

七草会十月例会は私が当番で、わが家で句会を開いた。六甲山三合目、海拔三百メートルのわが家のあたりは、山の匂いの風が届き、大阪湾が一望できる。坂道ばかりで些か不便といえは不便ながら、訪ねてくる人はみなこの眺望に満足して頂けるし、句材には事欠かない。この日は少し枯れを兆した螻蛄を見つけた。「いぼむしり」は、この虫で撫でると疣がとれるという俗説から来たかまきりの異称である。かまきりというのはどこか孤独感を漂わせた虫である。その三角形の顔の二角に目があり、一角が口であることの発見。

愛蔵文庫判自解句集⑬

夜光杯 (やこうはい)

発行・2002年11月20日

著者・やまだひろこ山田弘子

発行者・山田浩路

発行所・株式会社梅里書房

東京都杉並区梅里1-15-13-101

☎03-3313-6431 〒166-0011

印刷・三和印刷株式会社

製本・松栄堂製本所

◇定価は函に表示してあります。

◇乱丁・落丁本は梅里書房までお送り下さい。

送料小社負担でお取り替えいたします。

© Hiroko Yamada, Printed in Japan, 2002

ISBN4-87227-200-5